

ガムラン・ワークショップを通して学んだこと

アジア文化学科4年 大谷 香世

私たちガムラン部は2007年から2008年にかけて2年間、九州国立博物館でガムラン・ワークショップをしてきました。このワークショップは月に1回のペースで開催され、インドネシアの楽器、ガムランを使って参加者の皆さんに演奏指導をしていくという活動です。青銅でできたガムランはフルセット揃えると実に見事な楽器です。また、ガムランの音色は体で感じることができると同時に、疲れた体を癒す不思議な力を持っています。普段、なかなか馴染みのないガムランに触れるこのワークショップでは、参加者の皆さんがそれぞれ関心を持って参加され、私たちも刺激を受けながら活動を行うことができました。ここではこの活動を通して得たこと、感じたことについて、いくつか述べさせていただきます。

まず1つ目に参加するにあたり、いくつかの不安がありました。それは自分自身もまだクラブ活動を通してガムランの勉強をしている立場であるにもかかわらず、参加者に指導できるのかということです。参加者の方々は意欲的に質問されるため、当初は的確に答えることができず反省することが多々ありました。しかし、そんな自分に気づき、ワークショップの回数を重ねることで知識を確かなものにし、私自身が育てられていきました。指導をする立場も成長できるという点はワークショップの大事な意義だと感じました。

2つ目に私自身がとても勉強になったのが田村先生のレクチャーでした。毎回参加者が入れ替わるワークショップで、必要に応じて説明方法に変化を加えたり、参加者に馴染み深い



と思われる曲を演奏されたりして、ガムランの世界にひきつけていました。いつも生きたレクチャーをされていて、指導にあたる私たちが改めてガムランの心地よい響きを感じることができました。

3つ目にこのようなワークショップを運営する側の様子も知ることができ、とても参考になりました。普段、裏方を目にすることはなかなかできないことです。ひとつの企画を行うときにはたくさんの人々が関わってくれていること、段取り良く準備をしなければ限られた時間内でワークショップを運営できないということが知ることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。

以上、3点が印象深く記憶に残っていますがここに書ききれないこともたくさんあります。たくさんの参加者の方々と充実した時間を過ごすことができ、また部員と一緒に同じ時間を過ごすことができたことが大変貴重な体験となり、私の宝になりました。社会教育施設である博物館で、学生が市民のみなさんに自分たちが得たものを還元していき、交流を深めていくという活動は、これから社会教育を進めていく上で一般的なスタイルになるべきではないかと感じています。大学生の間に、学内のクラブ活動に留まることなく学外での活動の機会を与えてくださった田村史子先生には感謝しています。

今私は九州国立博物館で働いています。これからは裏側でワークショップを支えていくという立場になります。このワークショップで培ったことを活かして日々来館される方々と学ぶ楽しさを共感し、さらにより博物館にしていくために日々尽力していきたいと思います。

